会長講演

『私の超音波人生は出会いそのものである。
～その先に見えるものは～』

茨城県立こども病院 小児超音波診断・研修センター
浅井宣美

私の超音波の人生は平成元年、都立大塚病院で望月幹彦氏(現豊島病院)に師事することから始まった。在職中、公私ともに大変お世話になったことを鮮明に覚えている。小児領域を本格化させたのは平成10年都立清瀬小児病院へ異動してからであるが、間もなく厳しい洗礼を浴びることになる。小児先天性疾患、代謝性疾患をほとんど経験しておらず、途方に暮れてしまった。特に奇形にはまったくお手上げ状態であった。当時の副院長に今後どうすれば自分は役割を果たすことができるのか相談した。「奇形は専門の先生に聞けい」ギャグ好きの私を見透かしているような優しいアドバイスであった。

ここから、12年間清瀬小児病院にお世話になったのであるが、今の自分があるのは間違いなく横山哲夫先生(現YYキッズ・クリニック)のお陰である。内田正志先生との出会いもその延長線上にある。奇跡の連続であったと思う。

2011年3月10日、26年間在籍した東京都を辞し、水戸に移住した。翌日、まさか東日本大震災に遭おうとは。

しかし、ここから血が騒いだ。当時の院長、土田昌宏先生もまた私の恩人の一人である。「できることをおやりなさい。できるだけ援助しますから」、「茨城こどもECHOゼミナール、やってみませんか？」今考えると、神のお告げである。

土田先生の後を引き継いだ前院長、須磨崎 亮先生のご支援を受けながら、何をやってきたか？そして、今後どうしようとしているかをまとめると以下の3項目になる。

① 24時間 365日、いつでも対応が可能となる遠隔超音波アドバイスシステムを導入し、小児救急医療の質の向上を目指している。

② 日常診療、救急診療で超音波が果たす役割は極めて大きい。
小児科専攻医が診療のスキルアップを図るなかで、超音波診断技術を習得し、エコーを「一生使える飛び道具」として認識し、今後の診療（小児科人生）に役立てることは意義深い。

③ これから、小児臨床超音波を展開するにあたり、人材育成できる指導者が必要である。
当院ではすでにエコーの画像解析を専門的に行い、施行者にフィードバックするシステムが構築されている。患児およびご家族の不安を取り除くコミュニケーションスキルを学ぶことができる。安心感を担保できる指導者の育成を目指している。